

第一章 人間教育の根本的人生觀

三、一言で尋常小学生が良くなる

この間も、ある奥さんが尋常六年になるお子さんを伴れて来られたのであります。そしていろいろとお子さんのことをわたしに訴えられる、「この子はとても乱暴で、勉強をしません。今度中学に入るといのに、この分ではとても進めません、こんななまけ者はありません」といわれる。それでわたしは申しました。「あなた、子供の前でそんな悪口をいうものではありません。この子は悪い子だ悪い子だといっている言葉の力で悪くなってくるのです。こいつは悪い悪いと言っていると誰でも悪くなってしまう。あなた、よくこのお子さんの顔をごらんなさい。西郷隆盛によく似ているではありませんか。立派な人相をしているではありませんか。このお子さんは偉い人になりますぜ。お母さんが悪い悪いということから悪い真似をしていたんだね。あなたはきつと西郷隆盛よりも偉くなるんだよ。明日から勉強をよくしますね」と、わたしは信念を注ぎ込むような調子でそれだけ言ったのであります。すると翌日母親が来られて、お蔭様で、すっかりうちの子が変わりましたといって大変お礼を言われるのです。これまで、夜、寝しなに洋服を脱いだら、上着をポイとこっちへなげる、ズボンがあっちへポイとなげるというような抛ほう

りっぱなしだった子供が、わたしに賞められた晩からちゃんと脱いだ着物を始末して、枕頭まくらもとに丁寧まじまじにたたんで積み重ねて置くようになりましたし、勉強も落ち着いてするようになりましたと申されるのであります。これと同じ日に来られた別なお子さんも、わたしがたった三、四言ことほめただけで大変よくなられて、谷口先生が好きだ好きだと言って、自分で自転車に乗って神想観に来る、勉強も大変よくするようになれたのであります。賞めるということは実によいことであります。実に人類を光明化するのには賞め言葉であります。ところがたいいの人はかわいひ者ほど賞めない。人前で悪く言う、自分の子を悪くいう。謙遜のつもりかもしれないけれど、自分の信頼している親が、自分を悪い悪いと言うものだからまちがいはない。自分は悪い子だと思ひ込んでしまつて、その子供は悪くなつてしまふのであります。誰の前でも、自分の子は正直に賞めればよいのであります。世の中では前科者を見ると彼は悪いことをした奴だ、前科者だ前科者だといって爪はじきする。だから、刑務所を出ても行く所がない、誰も雇つてくれ手がない。それでもういつぱん悪事をやれという氣にもなる、「悪人悪人」と言うから、言葉の力で悪くなつてしまふのです。これまでの宗教家もそのとおりで、人類を愛するあまり、善くしてやりたいあまり、人類よ、お前たちは罪人であるぞ、悪人であるぞ、そんなことではいかんから善くなれと言って諭さとすのでありますが、「罪人罪人」と呼ぶ以上、「どうせ自分は罪人で善くなれつことはない」とますます悪くなつてくるのであります。宗教家が、人間は罪人である、罪深いものであるから改悛かいしんしてよくならなければな

らないと、いくら大^{たい}呼しても世の中を光明化することができなかったのは、「お前たちは罪人だ」という言葉の力であり

ます。「お前は罪人だぞ、罪人だぞ」といわれていて善くなるものではありません。今までの宗教家も決して人類を悪くするつもりではなかった。母親が愛する子供に対するように、「お前たちは悪い人間である。人類よ、お前は罪が深いぞ。悪人だぞ、悪人よ、早く善くなれよ」といつていた。ところが言葉の力ということを知らないために、結果は正反対です。ますます悪くなってきたのであります。これは少し心理学を研究したほどの人なら誰にでもすぐ解る道理であります。催眠術を少し研究なさった方なら、誰でも知っていらつしやることであります。催眠術をかけて、ここにあるコップでも「このコップはとても重い。君は力が無い弱い者だ。あなたはもうこれをあげることはできないぞ。サア上げてごらんなさい」という暗示をかけて上げさせると、どうしてもこのコップを持ちあげないのであります。今までの宗教家の言葉の使い方はまちがっていたのであります。「お前は力が無い。サア持ち上げてみよ」と言うを持ち上がらない。それと同じく「お前は悪人だ。サア善くなれ」と言っても善くなれない。こうして今までの宗教家は人類を光明化そうと思ひながらかえって人類を暗黒化していたのであります。医者も名医は別として、へっぽこ医者は病気の症状に捉われて、生命の神秘力の実相を見ない。そしてちよつとした病氣でもすぐ手遅れだ、大病だといって、よくなる病人でも殺してしまうのであります。生命^{ほんのすうがた}の実相を見て、善くない現象を見ないのであります。病人は医者に悪く言われるとぎやふんと参

ってしまつて、自然^{りやうのう}療能の力が衰えてしまつて、快^よくなる病人でも快くならないのであります。

第三章

四、ニイルの教育思想を読む

「問題の子供を持つ親たちについて困ることは、彼ら自身の心理状態のいかんが、子供の状態に大いに影響するということとを、どうしても承認しない場合の多いことである」これは、霜田静志氏から最近、わたしに贈呈して下さった同氏訳ニイル原著の『問題の親』に、見出される言葉である。ニイルはむしろ精神分析学者で、精神分析を教育方面に応用している新しい革命的教育の創始者であり、心靈学的に思想の波動の客観的存在を説いている人ではないが、それでも子供を教育しながらジツとその子供と親とを見つめるとき、氏は親の精神そのままが子供に現われていることを発見してそれを書いているのである。子供の病氣は親の病氣、子供の神経衰弱は親の神経衰弱、子供の夜泣きは親の夜泣き、子供の喘息は親の喘息、子供の成績不良は親の成績不良だという「生長の家」の思想と同じことを考える人が遠い英国にもあることは心強いことである。ニイルはまた次のようにも言っている。

「つまりそれは、子供は母親の一部分であり、子供の神経病は母の神経病だからである。」

だから子供を無病健全に育てようと思うならば両親は子供を親の觀念で縛^はつてしまわないようにしなければならないの

である。肉体は「自我の自由」を縛るがゆえに聖者は自分の肉体を殺したくなる。それと同じ理由で、親は子供の「自我の自由」を縛るときは、子供は親を殺したくなる。聖者はハッキリ肉体の自殺を意欲しないと同じく、子供もまたハッキリ親を殺したいとは意欲しないが、聖者が「肉体嫌悪」に陥ると同様の理由で、子供は「両親または片親嫌悪」に陥り、聖者が肉体を苦しめる苦行によって喜びを感じるように、子供は両親に反抗してそれを苦しめて喜ぶようになるのである。苦行の聖者と、親不孝の子供とはまったくちがっているように見えて同じものである。

親の束縛に対する子供の反抗は往々にして寝小便として顕われる。蛙を捉えるとき、蛙は小便を放つて逃げて行くであろう。黄金虫を手で捉えるとき彼は蒼黒い不快な便をして逃げて行くのである。これらの虫は心に浮かべたキタナキ念(反抗の念)を具象化してそれぞれ小便、大便のごときキタナキ物にあらわして逃げて行くのである。ニールは「嘘をついたために打たれた子供が、指をなめたり寝床をぬらしたりするような赤ん坊の習慣に帰る」とその事実を指摘している。大人はさすがにキタナイ念を思い浮かべても自省の念で、子供や昆虫のように火小便を放りかけないのであるが、痰を吐きかけてやりたくなったり、嘔吐をもよおす気がしたりすることは往々にしてあるのである。しかし、大人はたいていそんな場合、自省の念でそれを押し消してしまうが、心に思いつかないかぎり、表面は平静でも、消えないでいつまでも集積され、やがて「縁」を得、具象化して、その時の観念の

象徴となるような嘔吐をもよおす病氣または痰咳を伴う病氣に具象化してくるのである。天理教で「病氣のもととは心から」と言い、「ひとのみち」で病氣は神示と言ひ、生長の家で「肉体は心の影」と言うのはそれである。医学の研究はおおむね病氣を起こすところの外的「縁」の研究であるが、病氣を起こす内的「因」は遠くわれわれの潜在観念(なお、深く探れば念の蓄積すなわち業)の中にあるのである。しかし「因」ありとも「縁」がなければ病氣という「果」を結ぶことはないから、医学は医学で大いに研究してもらいたいものである。生長の家は内的「因」の撲滅に専念するし、医学は外的「縁」の撲滅に尽くしてくれる。「因」「縁」どちらを撲滅しても果は結ばないのである。(注)

たとえばここに植物の種子があるとすると、その植物の種子は五官に触れない透明な心的存在のようなものであるとする。それに土壌をかけたとき植物が発生したならば、その土壌しか眼に見えない人間は、土壌が原因でその植物は発生したと思うであろう。しかし土壌は「縁」であって、透明なる五官に触れない心的存在が原因なのである。冷たい風に当たって風邪をひいたといえ、冷たい風が原因で風邪の原因となつて風邪をひいたように見えるが、冷たい風に当たつても風邪を引かない人があることを思うと、冷たい風が風邪の原因でなく、心に発熱痰咳などで象徴されるような因を持つた人のみが、冷たい風という「縁」に触れて風邪を引くのである。

(注) 病氣を起こす内的因は遠くわれわれの潜在意識の中にあるということについての広範な研究は米国力ー

ルーメニンジャー博士の名著「おのれに背くもの」
を読みたい。日本教文社から上下二巻の大部の訳
書が出ている。

第五章 左翼思想を転向する道

この間、読売新聞の宗教欄に、武本喜代蔵という牧師さんが、「贖罪信仰の實際化」と題する稿を寄せられて、その中に光明思想についてちよつと言及しておられました。それを読んでみますと、宗教によって病気が治るということは、有るべきことだといってある程度まで肯定しておられるのであります。『この頃『人間本来罪も汚れもない』という説があるがそれは受け取れぬ。そんなら強姦しても強盗しても、その人間は罪がないというのか。そんな馬鹿なことはありえない』といったようなことを書いておられました。わたしはそれを読んで、ああいう人は神様の創造つたこの世界に本来に罪がないということが分からない憐れな人だと思わされたのであります。われわれがその人の実相を——本来神の子であり、罪なき者であるという本当の姿を——認めた時、その人は強姦することも、泥棒することも、いかなる悪を犯すことも自然にできなくなってしまう。他からお前は罪なき、浄い者であるという気持ちで純粹に対されたならば、泥棒しようとして努力しても、泥棒などはしぜんにできなくなってしまう。三界は唯心の所現でありますから、「罪あり」と認めたら罪が現われ、「罪無し」と認めたら罪が消える。泥棒や、強姦をするものは、人間とはそういう罪を犯すのがあたりまえの

本来「罪アル者」だと思っているものなのです。（拍手起こる）

ところが、自分は神様の子であり、生まれつき正しい聖い者だと悟ったら、しぜんにそんな罪を犯さなくなる。つまり人間の実相はすでに神であり、仏である。それを認める時に、その人にしぜんに実相の善さが現われてきて、いくら罪を犯そうとしても犯しえない。いくら左翼思想に走って實際運動に自分を投じようとしても、転向せざるをえなくなるのです。「生長の家」では、今まで努力してやめようと思ってもやまらなかった酒や煙草も、しぜんにやまる。これはしぜんに実相が現われてくるのであって、今までの努力してやめようと思ったのは、悪の存在を認めて、努力によってこれを抑えよう、抑えようとしていたのでありますが、それは最初から悪の存在を、罪の存在を認めてかかるからして、努力しても、その罪が、その悪がやまなかったのです。ところが、そういう悪の存犯を見ないで、ただ、人間は神の子で無限に善いもので、本来罪なしと知れば、しぜんに悪は消え、善が強い力をもって出てくるのであります。（拍手）これがわれらの光明思想のもつ權威なのであります。われわれ、自分は神であり、仏である、罪はないと知る時、罪はしぜん消えてしまうのです。罪は本来ないから消滅するのです。本来有るものならば消え失せることはない。ないものがあると思っているから、あたかもあるがごとくに外界に現われてくるのである。すべての人間はみんな神の子であり仏の子であつて、罪は本来ないと認める時、世界中の人が神の子になり、これを知らされた時にすべての人が釈迦になり。キリストに

なる。キリストの再臨ということは、自分に宿る神、仏なるものを見ないで、神は在^{いま}さぬ、自分は罪深いものだとして自分の内に宿る神性を罪の観念で縛りつけてハリツケにつけていた、そのしばりを解き放って、本来罪のない神性、仏性を自覚するということであります。この人間本然の善さをすべての人に知らせること、これこそ人間の本当の教育であります。この人間の神性、仏性を現わすという真実唯一の教育が「生長の家」の教育法なのであります。この教育法によりまして人々を教育していったならば、大いなる効果をあげられることは必然であって、現に「生長の家」の教育法によって多くの効果を上げている方がたくさんある。

第六章 入学難と就職難に勝つ法

もたざる者はなお奪われ、もてる者はなお与えらる

以上の例話は何を語るとお思いになりますか。前者、すなわち零落^{おちふ}れたる雑誌記者は「自分は生活に困っているから救^{きゆうじゆつ}恤^{じゆつ}を受くべきものだ」と自己自身を見くびり、自己を救恤せざるものを恨み、手段を弄^{ろう}して恐喝してまで自分の生活費を得ようとして結局断られたのであります。後者、職業を得たる青年は、悪人だと言われる社長にも「神の子」なる実相を見ようとし、困難を見ず、寒風と積雪の北海道に、平然として仕事を求めに出^いでんとし、しかもなお、我意を通さず、父の愛と調和せんとして努力している掬^くすべき風格が見

えたので、たちまち就職口を得たのであります。

ここにわたしは、教育とは何ぞやということを知るのであります。「ひとのみち」教団では「貧乏」はその人の「心のまちがい」を知らせるための「神示^{みしらせ}」であって、その人自身の「心のまちがい」が直ったら貧乏も治るのであるから、貧しき人を助けるのは罪悪である、といって救^{きう}つてくれません。「生長の家」ではそれを救^{きう}つてくれますか——といって質問状をよこされた人もあります。「ひとのみち」で本当にそういうのかどうかは知りませんが、「生長の家」で申しますところの「三界は唯心の所現、肉体も環境も心の影」だという「心の法則」から申しますと、正^{まさ}にかくあるべきはずであります。しかし、貧乏は神示^{みしらせ}であるから救^{きう}うことは必ず罪悪だと、一方的に凝り固まったことは生長の家では申しませぬ。救^{きう}つてもよい心の状態になったときに、この後者の青年のように「生長の家」はたちまち救^{きう}うのであります。まだ救^{きう}つてはかえって心境の好転に悪い状態だと思われる心の状態にいる人に対しては、どんなに困^くつていても救^{きう}わないのであります。いな、かかる人は、心境の改^かまらざるかぎり自己の運命が決して好転するものでないことを知ることが、本当の彼の救いになるのですから、彼を救^{きう}わないのではない、彼を救^{きう}わないことが本当に彼を救^{きう}いつつあることになるのであります。

第七章 優良児の創造

無念無想と精神統一との区別

「精神統一をいろいろと修行してみましたが、どうも無念無想になりません、わたしにはどうしても精神統一はいくぐあいに行なわれません」という人がなかにはあります。こういう人は、精神統一というのは、精神が活動しなくなつて、何もわからなくなることだと思つていられるようであります。わたしはそういう人に、「何も考えなくなり、何も思わなくなり、何も聞こえなくなりたいのだったら、石になるか、死んでしまいか、眠つてしまひかなさい」と申すことがよくあります。精神統一とは茫然となることでも、恍惚となることでも、前後不覚になることでも、睡眠することでも、石になることでもないであります。精神統一とは、精神の活動の極きぎょくの極きぎょくでありまして、坐禅のさいに、立てておいた線香の灰の落ちる音までもハッキリわかるというそれほどの精神明澄めいちようの境地であります。

第八章 人類無罪宣言

四、科学と宗教との一致

近代の科学者はすべての元素を還元させて一樣に電子によつて成り立っていると申します。そしてその原子はプロトンすなわち陽電核と、エレクトロンすなわち陰電子との二種類に分かれています。中心に陽電核があつて、その周囲を陰電子

がとり囲んでいる。すなわちすべての物は陰、陽、二つの力の交合によつて成り立っていることを科学者は発見しているのであります。この陽電核は中性子と陽子その他の結合であります。ともかく電子はエネルギーの渦巻うずまきということになつておりまして、陰陽両性のエネルギーの渦巻が互いに組み合うことによつてさまざまの物質が生まれる、物質と見えるものすべて陰、陽二つの言葉が組み合つて生まれてきた、ということになるのであります。これを神道では古来天津祝詞こらいあまつのりに神漏岐かむろぎ、神漏美命かむろみのみことと書いています。カムロギのカムとは物を生み出すことであつて、物を醸かむ働き、天地とががみ合う、陰と陽とが結合するという言葉であります。ロギーとは、ロゴスが變化した言葉でありまして、ロゴスにロギーとロミーとの二種類あります。ロギーは男性の言葉でイザナギの命みこと、ロミーは女性の言葉でイザナミの命であります。命みことという字は命令の命めいの字を書きますが、言葉のことであります。われわれでも、命令する場合は言葉で命令する。命令に生命があり、軍人でも官吏かんりでも命令によつて動くのです。命令の命めいの字は生命の命めいの字でありイノチと読む。言葉は神でありこれにイノチがあるのです。さて、言葉の陽——「ア」の声はカムロギーの命みことであり、言葉の陰——「ウ」の声はカムロミーの命みことであります。そのカムロギーの命とカムロミーの命と組み合つていつさいの物が創造つくられたのであります。その御創造になつたところはどこかと申しますと「筑紫の日向ひむかの小戸おとの阿波岐原あわぎはら」とあります。この筑紫というのは九州のことではないのでありまして、いつさいのものを尽くしている、いつさいのものを包容し尽くしている究

極無限の大宇宙のことです。日向とは日に向かうすなわち光明に照らされるということでありますから「筑紫の日向」とは光明遍満の大宇宙ということであります。この究極無限、いっさい包容の光明遍満の世界においてカムロギーとカムロミーの命すなわちミコトバによって伊邪那岐命がいっさいのものを浄められたということが書いてあるのが、この天津祝詞なのであります。伊邪那美命が夜見の国に行かれたら伊邪那岐命が別れを惜しんで夜見の国へ追いかけて行かれた。それで伊邪那岐命の身が汚れたということで身褻祓をせられたというのであります。ここに「創世記」におけるアダムとイヴと同様のことが書かれてあるのであります。伊邪那美命が夜見の国に行かれたということは、イヴの方が蛇の知恵に瞞されたということに当たるのであります。日本の『古事記』では伊邪那美命が夜見の国にゆかれたことになっており、アダムがイヴの迷いのまねをして知恵の果実を食べたということが、伊邪那岐命が伊邪那美命の後を追うて夜見の国へ行かれたと『古事記』に書いてあるのであります。夜見の国とは、ヤミの国——暗の国、言い換えると、無明の国、迷いの国ということなのであります。その迷いの国に行かれたというのはイヴが蛇の知恵に瞞されて、人間を物質で造られた物質だと思ってエデンの楽園を逐い出されたということと同じことを表現したものであります。イザナミの命が夜見の国へ行かれたそのあとを追ってイザナギの命が夜見の国に行かれた。そしてイザナギの命は夜見の国に行つて体が汚れたというので、小戸の阿波岐原で身褻祓をされたということになっております。この小戸とは「音」のこと、音声のこ

と、言葉の意であります。「阿波岐原」の「あ」は「あばく」「あらわれる」ということで、「はぎ」もやっぱり、物を「はぎとる」こと、暴露さすこと、「はら」というのはパラパラと散りゆく相をあらわす言葉ですから、「小戸の阿波岐原」というのは、迷いを剥ぎ取り、実相をあばき出す声音の力ということでもあります。この声音の力——言葉の力を正しく用うれば天地八百万の神々も協力していっさいの罪、汚れを浄めてしまふということが書いてあるのが天津祝詞であります。とにかく、伊邪那岐命は言葉をもつていっさいの罪、けがれを祓い浄められたのでありますが、この伊邪那岐命の言葉の力で宇宙もろもろの罪穢れを祓い浄めるということが、「生長の家」の使命だということになります。だから、生長のまの神のお姿を霊眼で見た人の話によると伊邪那岐命のような白髪のお翁の姿で現われられるのであります。天理教祖は自分自身を伊邪那美命の顕現だと言われまして、伊邪那岐命と月日揃うてこの世の申の浄化が完成するという意味のことを言われたそうであります。天理教祖の筆先によりますと、本来罪というものはない、チョイとホコリが付いたばかりだとありますのに、現在の天理教教師の説き方では、あまり「因縁因縁」ということを説きすぎているので、かえって、言葉の力で人間に罪を背負わすということになっているのであります。この反対に言葉によって浄めてしまったら本来の実相が出てくるのであります。つまり伊邪那美命が夜見の国へ行かれた働きが天理教の現在の働きで、橘の小戸の「あわぎ原」で、その暗の穢れを祓い浄める働きが「生長の家」であります。キリスト教では近ごろしきりにキリスト

の再臨ということを唱えている一派がありますが、「生長の家」でもキリストは再臨する、というのであります。否、むしろすでに再臨しているというのであります。（聴衆緊張する）かくわたしが再臨していると申しあげるキリストはユダヤの野に、二千年前生まれたところの「肉体キリスト」ではないのであります。イエス自身が「アブラハムの生まれぬ前より我はあるなり」と言われたところの、久遠（くおん）生きとおしのキリストであり、首（はじめ）より現在に到るまで、また未来永劫に到るまで生きとおしの真理のキリストであります。ところが人類はキリストが二千年前ユダヤで磔（はりつけ）刑になったと思っているのでありますが、一転して、キリストという者は決して磔（はりつけ）刑になつてはいないぞということを人類が悟るのがキリストの再臨であります。（聴衆驚く）すべての人間の真相は神の子である、「創世記」に明らかに書いてあるのに、いつのまにか人は皆罪の子であるというぐあいに宗教家が宣告（せんこく）してしまつた。「神の子」を言葉で「罪の子」扱いをすることによつて手も足も動かぬようにしてしまつた。これが、神の子キリストを磔（はりつけ）刑にかけたということであります。人類は本来神の子であるのに、神の子ではない、神はなんじの内に宿つていない、なんじは罪の子であると封印して十字の木に打ちつけてしまつた。これがキリストを磔（はりつけ）刑にかけたということであります。天地の生命、真理、すなわちキリストがわが内に宿つていますのに「ここにキリスト在さず」と貼紙して封じてしまつてゐるのをキリストを磔（はりつけ）刑にかけたというのであります。「我に罪あり、この中にキリストなし」と貼り札してしまつてゐる。その貼り札を引き破つて、十字架からおろして、

「ここにキリストいます」と人類に差し示す——そうすると、迷いは消えて、自分の真相を觀、そこにすでにキリスト在（いま）すと悟るのであります。これがキリストの再臨であります。今までキリストがわが内に在（いま）しながら、「キリスト在さず」と貼紙してゐた、その貼紙をひき破つて、「キリストここに在（いま）す」とはつきり宣言し、すべての人類の生命の中、すべての人類の心の中に、キリストを再臨せしめるという——これが生長の家の役目であります。すべての人間の心の中で磔（はりつけ）刑にせられていたキリストを十字架からおろして、自由自在に顯われうるようにいたしますと、すべての人間、善くならざるをえないのであります。今までのように「罪人（つみびと）罪人」といつて人間の真相を動きのとれないように磔（はりつけ）刑にかけているかぎり善くなりつこはありません。久遠、無限の力が内にありながらもはりつけになつていて出てこない。この縛りを解いて人間の真相のキリストを出すようにすれば、悪しきことはしぜんに消えて、実にのびのびと本当の万国浄土がこの世に樂々と湧き出てくるのであります。

生命の真相 谷口雅春 日本教分社